

語彙力を高める単語・語句学習のあり方

千古 利恵子・中條 敦仁

企業は新規採用者にコミュニケーション能力を求めている。見方を変えれば、現状の学生がこの能力を持っていない結果だといえる。学校で言語教育に取り組んでいるのだが、その能力が欠如しているといわれるのは、学習したことが生活に直結していないためではないか。今後、教育に求められるのは、学習者の誰もが「学んだことが生活に生かされた」という実感を得、学習に意味を見出す、つまりことばが身体感覚の一部として定着していくための学習プログラムの開発である。

キーワード：語彙力、共通記号、身体感覚、授業工夫

はじめに

経済団体連合会は、1997年以降毎年「新卒採用に関するアンケート」¹⁾を実施し、その調査結果を公表している。2012年の調査によると、新規採用者に求める能力の内、最も重視するものとして挙げられたのが“コミュニケーション能力”であったという結果が示された。この“コミュニケーション能力”は、ここ10年間の常に第1位である。他者とのかわりの中で利益を追求する企業にとって、“コミュニケーション能力”は重要な能力であり、当然持っていなければならない能力であるとされるのは当然といえる。

しかし、注目すべきは、当然持つべき能力であるにもかかわらず、1位に輝き続けているということだろう。新規採用者のコミュニケーション能力が著しく低下し、わざわざコミュニケーション能力を試さなければいけない現状があるという点である。

「それでは、社会人になる直前に勉強してコミュニケーション能力が高めよう！」というよ

うな簡単なものではない。やはり、一定の「積み上げ」が必要である。その積み上げの場を提供するのが教育機関の役目である。中でも、日本語による「読むこと・話すこと・書くこと」の教育を担う「国語」の授業の役割は大きい。そこで、本稿では、将来必要となるコミュニケーション能力、特に言語表現に焦点を絞り、国語教育の中で言語表現を育てていくために必要な考え方と実践法の一例を示してみたい。

1. 共通記号の必要性

情報の伝達には、共通記号が必要となる。われわれは、共通の記号が設定されることにより情報伝達が可能となるのである。標識や信号、ジェスチャーなど、世の中にはさまざまな記号体系があり、言語もその記号の一つである。例えば、自分がフランス語をまったく知らなければ、フランス語を話す人との言語を媒介とした意思疎通は難しいように、意味を共有した共通語、文法構造、表現法を持たなければ、情報の伝達はできないのである。この場合は日本語と外国語との問題であるが、日本語と日本語との

間にも同様の状況は起こるのである。我が国の将来を担う子どもたちが、日本語という共通記号を用いている時に、このような状況に陥らぬようにするには、何が必要なか。社会人として生きるために最低限必要となる共通語、文法構造、表現法を身につけることだろう。

心身共に安定し、充足感を得られる社会生活を営む上で、言語を媒体とした他者との意思疎通は絶対不可欠なものである。従って、言語という1つの共通記号の習得が、人間には必要になるのである。

2. “ことば”と“語彙”“語句”“単語”

保育所保育指針や学習指導要領はもとより、国語教育に関する書籍には「ことばの力」「ことばを豊かにする」「ことば増やす」「語彙を増やす」「語彙力を高める」など、“ことば”“語彙”を育成する表現が多い。また、国語の授業に関して言うと、「新しい語句」「次の語句の意味を選びなさい」「重要単語」など、“語句”や“単語”の獲得を促す表現も多い。そもそも、ことばと語彙と語句と単語の関係はどうとらえればいいのであろうか。これらの関係を提示するには、より専門的見地からの検証結果をふまえるべきであろうが、「国語の授業の中」という限定した範囲での考察ということから、『新明解国語辞典（第五版）』²⁾の解説を掲出する。

ことば	*その社会を構成する人びとが思想・意志・感情などを伝え合うための記号として伝統的な慣習に従って用いる音声。また、その表現行為。〔広義では、それを表わす文字や、文字による表現及び人工語・手話語も含む〕
-----	---

語彙	*特定の範囲に用いられる語の総体（を集めたもの）。 *その個人が使用する語の総体（を集めたもの）。
語句	*文章を組み立てている一つひとつの語（と、いわゆる連語）。 ○連語とは…二つ以上の単語が一続きになって、複合した観念を表すものの称。
単語	*文を組み立てる要素としての一つひとつの言葉。

上記の記述を比較すると、4つの関係について次のことが分かる。

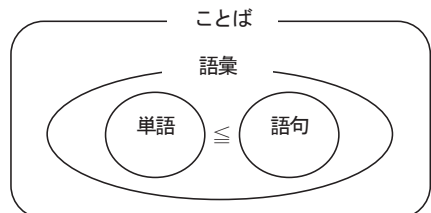
- ①単語が記号の単位としては最小である。
- ②単語と語句は記号の単位としては同じだが、語句のほうがより大きい。
- ③語彙は、記号の単位としては単語・語句より大きく、単語・語句の総体といえる。

さらに、ことばの解説「その社会を構成する人びとが思想・意志・感情などを伝え合うための記号」と単語の解説「文を組み立てる要素としての一つひとつの言葉」から分かることは、

- ④ことばは、単語・語句・語彙のすべてを包括する存在である

ということである。

つまり4つの関係は、単語・語句の総体である語彙がことばを構築していくための基本要素ということになるのである。これを図式化すると以下のようにできるだろう。



<図1> 4つの関係を単純化した図

3. こどもの将来に備え何から始めるか

冒頭に示した通り、企業は「コミュニケーション能力」を最重要視している。「コミュニケーション」の意を掲出するなど不要だろうが、新明解国語辞典（第五版）の解説を紹介しておく。

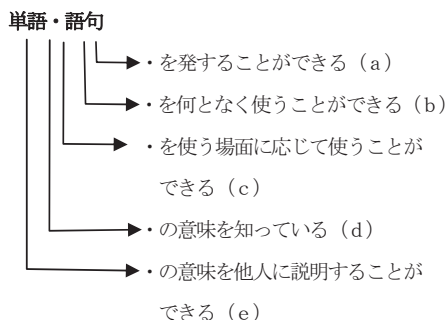
*通信・報道

*言葉による意思・思想などの伝達

企業の求めるコミュニケーション能力は多様であろうが、その基本は「“言葉”による意思・思想などの伝達ができる能力」と考えられる。では、コミュニケーション能力を育むには何から始めればよいのか。意思・思想の伝達手段であることばの力を高めることから始めれば良い、ということになる。〈図1〉から考えると、「先ずはことばを構築する基本要素の核にある単語・語句の習得数を増やす活動から始める。次に、その総体である語彙力を育む。」と言える。

4. 単語・語句の習得

「先ずは単語・語句の習得数を増やす活動を始める」とはいうものの、「単語・語句を習得」しているか否かを見極める必要がある。しかし「習得している」状態の判断は難しい。判断基準を以下のように設定してみる。



〈図2〉単語・語句の習得

〈図2〉をもとに単語・語句の習得の段階をまとめると、次のようになる。

第1段階－ a 「発する～」・ b 「何となく～」

・生活していく上で感覚的（身体感覚の一部として³⁾）に習得し使用する。

第2段階－ c 「使う場面に応じて～」

・感覚的獲得を基本として、これまで観察・経験上の使用場面と現状の場面を見比べ、合致すれば使用。応用的に使用する場合あり。また、一部、学校での生活・学習等を通して使用場面と単語・語句の関係を知り、使用する。

第3段階－ d 「意味を知って～」

・意味や成り立ち等、学習を通して知識化する。

第4段階－ e 「意味を他人に説明～」

・自分の得た知識として、単語・語句を正確に駆使し、他人に伝える。

単語・語句の習得は、第1段階、第2段階の活動から始まる。たとえば、乳幼児が未知の単語・語句に触れたとき、まず音（発音）に興味を示し、音として習得する。さらに発達すると、音（発音）と使用場面を見、同じ場面に遭遇したときその音を発する。このように、身体感覚の一部として感覚的に覚えていくのである。大人であっても、未知の単語・語句に触れたとき、他者が使用している場面からその意味を想像・類推し、感覚的に覚えているものも多いのではないか。

乳幼児期を過ぎると、単語・語句の習得は主に教育機関において行われる。無論、幼児期でも、保育所や幼稚園などのように養護を優先する場であろうと、習得は行われている。

幼児の場合を考えると、あそびの道具である

絵本にふれることが単語・語句の習得の活動の一端になり、児童や生徒の場合になると、学校の授業が習得の活動に当たるのである。「教科書」という主たる教材に収録された特定の単語・語句の意味を知り、それらの単語・語句が登場する場面で、設定された内容の疑似体験を強いる。その結果として、単語・語句の意味と使用場面の関連性を肯定し、知識化を図るのである。仮に、既に感覚的に習得してきた単語・語句が教材に登場したならば、その意味の深化を追究し的確な使用を促すための教育が、習得の活動として進められるのである。

以上のことをふまえると、単語・語句を「習得している」状態とは、①生活の中で感覚的に②教育機関で教材から知識として習得し③その習得した単語・語句が身体感覚の一部として定着し④生活において運用できる状態になる、ことが理想といえそうだ。

5. 単語・語句の習得から語彙力へ

習得した単語・語句が如何に多くても、あらゆる場面に応じて運用されなければ、習得の意味をなさない。運用できる単語・語句が多ければ多いほど、他者への意思・思想などの伝達は容易になるといえそうだが、単語や語句の結合が的確でなければ、伝達は決して上手く行かない。単語や語句の結合には、核となる何かがあり、その核を包含するような有機的結びつきが必要になる。そのためには、習得している単語や語句の中から、直面するこの情態を表現するために必要なものを取捨選択することが重要になるのである。つまり、習得した単語・語句が、自身の中で整理されることが必要ということである。「特定の範囲に用いられる語の総体(を集めたもの)」「その個人が使用する語の総体(を

集めたもの)。」が語彙であることを踏まえれば、語(単語・語句)を感覚と学習で習得し、有機的に結びつけ整理していく活動を繰り返しおこなうと、語彙力の向上は望めそうだ。語彙力の高まりが認められれば、ことばの運用能力・コミュニケーション能力も、自ずと高まるはずである。

6. 語彙力の高まりを阻む2つの問題

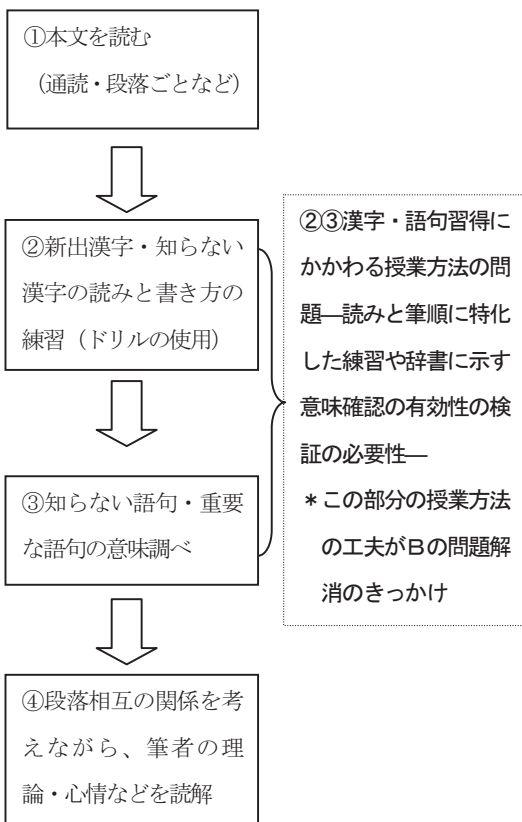
人は、その成長過程で「語(単語・語句)を感覚と学習で習得し有機的に結びつけ整理していく」活動をし続けられれば、コミュニケーション能力の低下は防げたのではないか。若者のコミュニケーション能力低下には、次に示した語彙力の高まりを阻む2つ問題があるからである。

- A. 世代間交流時間の減少
- B. 生活の一部・身体感覚の一部としての語彙力へつながらない教育

【Aの問題】中学生・高校生・大学生を観察していると、アニメやゲームなどで使用される特殊な用語や絵文字など単純な記号だけで会話が成立していることが多い。この様子を見ても、コミュニケーション能力が低下しているというより、むしろ、上の世代よりもその能力は高いという印象さえ受ける。ただ、彼らの問題は、同世代との深いかかわりの中から習得した語彙力のためか、高度なコミュニケーションは同世代でしか行えないことである。核家族化、地域のつながりの希薄化などから、子どもが会う大人が親や先生などに限られ、他世代との交流時間が減少し、他世代とコミュニケーションを図るための共通記号を習得することができなかったことが、原因の一つだろう。

【Bの問題】Aの改善にも教育は重要な役目を担う。授業に求められる言語教育は、特殊なものではなく、「世代を問わず通用する基本的な語彙の構築」と「生活における運用」に尽きるのである。しかし、現状の教育手法には問題があるように思う。「教育によって得た知識」と「生活における運用」との繋がりがなく、断絶しているのである。つまり、学校で習ったことが身体感覚の一部としての語彙として定着せず、生活に直結した形で運用できていないのである。

この様な状況を改善するため、「文章読解」として行われている授業の基本パターンをもとに、問題の所在を、次に示してみる。



＜図3＞文章読解授業の基本パターン

＜図3＞②・③の授業方法には問題がある。基本的な方法は、②は漢字の書き方と音訓を知る、③は対象語句を辞書で引き意味を知り、文・文脈の理解の一助とする、というものである。教科書に収録された教材を読むには、漢字を知り、語句の意味を知るとは、文章読解上も有意義な活動である。ただ、この活動に傾斜すると、時間を割いて習得した漢字・語句は知識の獲得に留まり、身体感覚の一部としての語彙としてはなかなか定着しないだろう。その結果、生活の中では運用できないという状況を招くのである。従来の授業の方法では、「なぜ勉強しないといけないの？」という学習者の発言が誘発されてしまうのである。

7. 「漢字テスト」と「語句の意味調べ」から「書く・話す」活動へ

先に示した＜図3＞②・③の部分を使いつつ、習得した語彙力を身体感覚の一部として定着させ、生活において運用させるためには、従来の授業をどのように改善すべきだろう。次に提示するプログラムは、改善の試案ということから、従来の文章読解授業のプログラムを残し、従来の漢字・語句を習得する活動に新たな活動を加えながら、継続的な実施が可能と考える方法である。

試案

単語・語句学習から生活における運用へと導く学習プログラム（小学校課程の場合）

～基本的な流れ～

1. 従来通り、文章読解授業（説明文・物語文）をおこなう。
2. 漢字ドリルなどを用いた書き取りの練習や

漢字テスト、語句の意味調べをする。

3. 学習した漢字・語句の中から、教師が2つ以上の漢字・語句を選び、児童に提示する。
4. 提示された漢字・語句をすべて使い、宿題として以下のパターンのどちらかを選択し、作文をさせる。
 - a. 生活作文 — 今日あったこと・最近あったこと・朝起きてからあったことなど、対象期間を絞って書く。
 - b. 創作作文 — 想像してお話を書く。
 ※低学年では、できる限り a を選択し、生活に密着した形でその語句を使えるようにするとよい。
5. 発表しあい、ともだちの経験したことや考え方に触れ、自分と比較する。

教材を使った事例

小学校1年生教材「おおきなかぶ」の場合

【大きなかぶ本文】 <小学校1年生国語教材>

…前半本文省略…

まごは、いぬを よんで きました。

かぶを おじいさんが ひっぱって、おじいさんを おばあさんが ひっぱって、おばあさんを まごが ひっぱって、まごを いぬが ひっぱって、

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

まだまだ、かぶは ぬけません。

いぬは、ねこを よんで きました。

かぶを おじいさんが ひっぱって、おじいさんを おばあさんが ひっぱって、おばあさんを まごが ひっぱって、まごを いぬが ひっぱって、いぬを ねこが ひっぱって、

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

なかなか、かぶは ぬけません。

ねこは、ねずみを よんで きました。

かぶを おじいさんが ひっぱって、おじいさんを おばあさんが ひっぱって、おばあさんを まごが ひっぱって、まごを いぬが ひっぱって、いぬを ねこが ひっぱって、ねこを ねずみが ひっぱって、
 「うんとこしょ、どっこいしょ。」

とうとう、かぶは ぬけました。

〔本文は、光村図書「こくご 一上 かざぐるま」による。改行部変更・挿絵省略〕

【大きなかぶ学習プログラム】

1. 従来通りの読解の授業をおこなう。動作化や劇をするのもよい。
2. 読解に際して必要となる語句について児童による意味調べ、教師による意味の提示をおこなう。

▼語句意味の例

<『旺文社小学 国語 新辞典 第四版』⁴⁾を使用>

〔よぶ〕…よ・ぶ【呼ぶ】〔動〕

①(注意を引くために)大きな声を出す。

〔例〕助けを呼ぶ。

②声をかけたり連絡したりして、来させる。

〔例〕いとこを東京に呼ぶ。救急車を呼ぶ。

③招待する。招く。

〔例〕客を家に呼ぶ。

④引き起こす。集める。

〔例〕人気を呼ぶ。

⑤名づける。

〔例〕ショパンを「ピアノの詩人」と呼ぶ。

▽活用：呼ばナイ 呼びマス 呼んダ

呼ぶ 呼ぶトキ 呼べバ
呼べ！ 呼ぼう

「なかなか」…なかなか〔副〕

①たいそう。ずいぶん。

〔例〕この本はなかなかおもしろい。

②簡単には。

〔例〕この問題は難しくてなかなか解けない。

△使い方：②はあとに「ない」「ません」などの打消しのことばがくる。

(生活作文例)

わたしのおとうとのれおが、あさ、
なかなかおきてこなかったので、
おこしにいきました。

きもちよさそうにねていたので、
おこすのがかわいそうだとおもった
けど、おかあさんに「おこしてきて」
とたのまれたので、おこしました。

れおは、いやそうなかおをして
いました。

3. 使い方を覚えてほしい単語・語句を2つ以上を見童に提示する。

5. 発表しあい、ともだちの経験したことや考え方に触れ、自分の書いた作文や経験と比較させる。

▼「よぶ」を中心とした発問事例

事例①「よぶ」と「まだまだ」

事例②「よぶ」と「なかなか」

事例③「よぶ」と「とうとう」

4. 「ここ1週間であったこと」を対象とし、「よぶ」と「なかなか」の2つの語句を使って生活作文を書くよう指示する。

この際、授業で確認した「よぶ」と「なかなか」の「おおきなよぶ」における意味はどれだったかを確認させ、その意味で作文をさせる。教師は作文例を示す必要がある。

以上、小学校1年生のプログラム事例を示したが、幼児の教育においてもこのプログラムは活用できると考えている。例えば、絵本に出てくる単語・語句を使って、お話を創作するゲームをしたり、替え歌ゲームをしたりすれば、このプログラムが目指す「身体感覚の一部としての語彙力を身に着けること」は可能だと考える。

なお、幼児の教育にかかわるプログラムについては、別稿で示したい。

おわりに ～まとめと課題～

我が国の言語教育の基礎は、主に学校という教育機関において、教科書を主たる教材として行われている。しかし、現行の授業プログラムでは、現代の社会が求めるコミュニケーション能力の育成が困難であることから、語彙力向上に関する考え方の転換と新たな授業プランの構築が盛んに行われている。

教育機関が取り組む活動は、単語・語句の習

得という点では効果を上げているが、身体感覚の一部として定着させ生活において運用できる状態、則ち、コミュニケーション能力の基盤を作るには至っていないようだ。学習者の誰もが「学んだことが生活に生かされた」という実感を得たとき、学習に意味を見出すにちがいない。子どもであれば「学んだことが生活に生かされた」という実感が、さらなる学習意欲を高めるにちがいない。教育活動のすべてが生活に直結した成果としての実感に繋がるとはいえないが、単語・語句の学習をもとに語彙力を高めたならば、子どもは各々の発達状況に応じたコミュニケーション能力をもち、生活に直結した言語活動ができるだろう。

本稿では、単語・語句の習得と語彙力を高めるための考察に留めたが、習得した語彙力を用いて「如何に自身の思想・意志・感情などを伝え合うか」という問題を、ことばの交換やコミュ

ニケーション能力の視点から検証し、言語教育の研究を進める必要があることを、最後に付け加えておきたい。

注

- 1) 一般財団法人日本経済団体連合会（以下、経団連）実施のアンケート。調査目的は、「企業の大卒等新卒者の採用選考活動を統括し、次年度に向けた動向を把握すること」。調査対象は、経団連会員企業1285社。経団連のホームページに調査結果が公表されている。（<http://www.keidanren.or.jp/>）
- 2) 『新明解国語辞典（第五版）』1997年12月 三省堂。
- 3) 「身体感覚の一部として」。ここでいう身体感覚とは、普段の生活において、極度の意識をしなくても、場面や状況に応じたことばが自然と口から出てくるといふこと。体験や学習を通して得た単語・語句が場面や状況と強く結びついた状態で語彙として定着していることを指す。生きていく上で必要な他の身体感覚と同様にことばの運用も身体感覚の一部であるべきだと考える。
- 4) 『旺文社小学国語新辞典 第四版』2012年12月 旺文社。